

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2016年秋 第23号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email: tani.kazuya.g@gmail.com

インドネシアの印象記

渡辺 重視 (1964卒)



《インドネシアに始まりインドネシアで終わる》

1964年卒業後積水化学工業・外国部に入社。以来輸出担当、シンガポール駐在、インドネシア出向、国内関連輸入会社出向、インドネシア出向、国際事業部輸出入担当、シンガポール出向、最後は大阪営業所の営業推進部で定年と色々な経験を積んだ会社生活でした。

初めてインドネシアの土を踏んだのは1970~74年のシンガポール駐在時代。シンガポールの代理店と一緒に出張したときで、空港はクマヨラン、宿泊はコタのホテル、顧客もコタに集中していた。当時の記憶としては、文字通りのチリウン川とタムリン通りのロータリー前のヌサンタラビルが鉄骨むき出しのまま未完成で放置されていたことくらい。

インドネシア勤務は1975年、ジャカルタに長期出張。赴任先は現地の塩ビ電線管メーカーと丸紅との合弁会社 PT. Pralon で、積水化学工業が硬質塩ビ管の製造・技術面を受け持っていた。社長は合弁相手の社長、副社長に丸紅、工場長は積水化学、私はペーパーの営業助っ人、さらに丸紅の長期出張者の副社長補佐という布陣だった。総販売代理店が合弁相手の会社でこれが後に問題を起す芽となった。当初合弁会社の経営は販売面でいつも総代理店ともめ、まるで舵なしの船のようであった。色々あった挙句、結果的に私の「鹹」と現地側株式の日本側への委譲という形で収まった。私も思い切った提案を出したもので、総代理店の販売価格は総代理店が決めてよい、その代わりに総代理店の口銭は売値の5%、という条件だった。だが、こ

れは総代理店の当初の意図に反するものであったらしく、結局、合弁会社に喰らいついて行くのを諦めたようだ。

この間、家族をジャカルタに呼び寄せ、クバヨラン・バルーならぬクバヨラン・ラマの平屋住まい。長男は現地の幼稚園に通い、次男は家で床を這いずり回り、幼児を抱えて衛生面の心配をしながら家内はかなり苦労したようだ。1976年、私は騒動の主犯として(?)、家族ともども一旦帰国したのである。

次は1980年から1983年まで同じ合弁会社の営業担当として再赴任し、その後社長を務めた。インドネシア勤務での教訓といえるかどうか分からぬが、経営面で対策を練ったりする時「日本人ならそんなことは絶対しないよ」というようなことでも、充分起こり得るという前提で対策をとっておく必要がある。そんな非日本的な思考回路が出来てしまったことである。

仕事に関するエピソードをいくつか紹介する。

●毎年の税務報告で会計士との会話：「一度本物の決算書を出して税務処理の簡素化を図れないのか」。返事は「そんなことをしたら来年から仕事が出来なくなる、2重帳簿は持ちつ持たれつの習慣なのです」。

●水道用の塩ビ管も製造していた。仕事からジャカルタの水道水の水質検査結果を見る機会があり、なんと蛇口から出ている水は大腸菌に汚染されている、とある。この結果を知ったわが社の日本人社長、朝の洗面にも恐慌をきたし、歯磨きはアクア使用とあいなったのである。



塩ビ管が山積みされたジャワ中部の簡易水道工事現場で

●ジャカルタの水道は水圧が低く水の出が悪い。このため各家庭はポンプで水を吸いタンクに貯めるのであるが、皆がポンプを使うので水道本管の中が負圧になる。そこにいい加減な配管とか盗水とかの原因でパイプラインの途中で穴があき、漏水どころか逆に外から水（地中の汚染水）を吸い込み、その結果飲用不適となるのであった。

●塩ビ管販売でクルブック戦争を経験。塩ビ管製造には強度（適度な硬度）を出すために炭カル（炭酸カルシウム）を少し混ぜる。炭カルのコストは当然安い。現地競争相手がコストを下げるため規定量の何倍もの炭カルを混ぜたパイプを販売し始めた。炭カルを沢山混ぜると安くなる、しかし脆く、重くもなる。日本のメーカーとしては泥パイプを作るわけにはいかず、肉厚を薄くして対抗したのだが、敵もさるもの、同じように薄物を上梓してきた。さあ、泥入りで肉厚を薄くしたのだから、指で押すとクルブックのようポロポロと割れるのである。スラバヤのさる大学でクルブックパイプを使用し、直ぐに割れたという話を聞いたが、それ以後の消息はなし。

●日本からの出張者のアテンドではスナヤンのドッグレース、アンチョールのハイアライ、サリナデパートの道路を挟んだ隣のカジノによく行ったものだ。カジノでは普段着のおばちゃん達がクシャクシャの100ルピア札を握りしめて眼の色をかえていた。

プライベートな面でのエピソードとしては

●ジャカルタのチキニ通りに TIM（タマン・イスマイル・マルズキ）という公園があり、そこの屋外ステージによく音楽会を聴きに行った。当時の有名歌手が次々に歌う流行り歌やチョイ古歌を堪能するのであるが、気がつけばいつも頭上の月は中天を回っているのであった。

●ジャカルタ市内に「オアシス」（店名は記憶不確か）という、メイドが一皿ずつ料理を肩の上に掲げながら運んでくる高級レストランがあり、日本からの客のお伴で行くのだが、そこで聴く流しのバタックのお兄ちゃん達の歌が最高だった。

●2度目の赴任時にはラグラグ会（Lagu2 Kai）が出来ていた。毎週水曜日の夜、ジャパクラブに集まりインドネシアの歌を肴にしてグラス片手に楽しむ集まりで、奥さん方公認の夜の外出チョイ飲み会であった。



《大阪でのラグラグ会発足

ーこれこそ定年後の生涯学習》

1983年に帰国し、4、5名のラグラグ会OBが集まり大阪ラグラグ会を立ち上げ1986年早々に第1回のラグラグパーティを北浜のインドネシアレストランで開催。しかし他の客もいることで歌えなかったの、歌える会場探しに苦労しながら、2か月に1度集まりインドネシアの歌を歌い始めた。しばらくして、もっと頻繁にと毎月集まることになった。折しも既に設立されていたボーカルマニスという女声合唱団と出会い、そのコネでインドネシアの学生の支援を目的としたインドネシアからの復員軍人を中心に設立されていた関西インドネシア友好協会（略称は関イ連）が主催するラブ・インドネシアという催しに、ラグラグ会も出演する機会が出来てきた。関イ連は大阪の総領事館と強く繋がっていた関係から、ラグラグ会も総領事館の行事に参加するようになったのである。



ラグラグ会の歌集には、大使館や総領事館の領事クラスでも聞いたことはあるが、知らないという古い曲が多く、“インドネシア歌曲の博物

館”であると私は人に紹介しています。

インドネシア民謡には、労働歌はごく僅か。出稼ぎはつらいよ、お母さんの所に帰りたいよ、といった歌が目立ち、当時の外領インドネシア社会状況が偲べれます。歌詞の中では言葉の使い分けが多く、例えば nyiur と kelapa、nyanyi と dendang、sorong と dorong、sepak と depak 等々。インドネシア語って本当は難しいんだよなど事あるごとに会員の自覚を促しています。

最後に、2003年8月の在大阪総領事館の祝賀会席上、大阪ラグラグ会は日伊両国の友好に貢献したということで総領事の表彰を受けたことを追記しておきます。

【写真】④ラグラグパーティでの合唱=2013年8月大阪・京橋⑤アンクルン演奏も加えボーカルマニスと合同で=同年5月寝屋川市

寄稿

Apa & siapa

インドネシアへの思い

井上 久生 (1966年卒)

卒業した年は、東京オリンピック後の不況でした。インドネシア語指定の求人は少なかったのです。私はメーカー系の二部上場の専門商社に、数少ないインドネシア語指定で入社しましたが、在勤中にインドネシア現地勤務はありませんでした。最初の海外赴任地はオーストラリアの Sydney。4年余駐在員勤務をしました。“訛りのある”英語に最初は苦労しました。

帰国して2年後、マレーシアのクアラルンプールで、現地の販売会社に4年間勤務しました。仕事の話は英語で通じました。マレーシア語は殆ど使う場面がありません。そして、マレーシア人の英語にも最初は慣れなくて苦労しました。語尾に～kah とか～lah がつくと、中国語訛りがきついのです。インドネシア語とマレーシア語の違いは、英語と米語の関係でしょうか？

さて、インドネシアに縁のないまま、会社生活も36年過ぎた定年間際に、会社の経営不振で早期退職勧告にあいました。潔く58歳6か月で「定年扱い」の退職。翻ると、アジア・大洋州関係の営業で25年余。その後企業内人材育成センターに勤務し、アジア地域の現地社員の能力開発事業で10年余の計36年半。悔いはありません。

2002年に早期退職してぶらぶら。そして JICA モンゴル日本センターのビジネスコース運営専門家として1年間モンゴルのウランバートルで勤務しました。公私とも経験が生かされた、密度の濃い1年でした。

モンゴルでの忘れられぬ思い出は、還暦の誕生日を出張先のゴビ砂漠で迎えたこと。真夜中に起きて、仰ぎ見たきらめく満天の星。感動しました。

その後、大阪の公益財団法人から非常勤で JICA 研修を支援する仕事の口がかかり、通算10年、マレーシ



奈良観光ガイド(英語)の同窓会で
右から2人目が筆者(2011年)

ア公務員研修のコーディネーターを務めました。現役時代の人材育成の経験と、マレーシア語とマレーシアの文化を共有できる仲間としてお役立ちできたのを嬉しく思います。

職務遍歴はまだ続きます。東京の公益財団法人で招聘講師として、カンボジャ、ミャンマーの幹部公務員の能力開発プロジェクトにかかわり2008年から2015年まで現地研修講師(写真⑥)を務めました。

話題のミャンマーについて一言：長年アジア地域で仕事をしてきましたが、ミャンマー人のまじめさについては感銘を受けました。5年間ミャンマーの公務員能力開発の研修にかかわって、その間1度もミャンマー人に対して不快な思いをしたことはありません。上座部仏教の敬虔な信者の所以でしょう。親日的でもあり、まじめ。今では日系企業が多く進出し、今後政権が安定すれば成長は可能でしょう。長年の軍政から民政移管でスーチー政権へ変わりましたが、順調な国の発展を祈っています。

72歳の現在、もっぱら趣味の世界に生きています。

- ① 男声コーラス：地元の男声コーラス「コンパーレわかくさ」のトップテナーとして47人の仲間と楽しんでいます。平均年齢は72歳プラス。
- ② 海外旅行：年4回を目指しています。そのうち最低1度は夫婦同伴です。
- ③ Face Book で内外のメル友と交信。
- ④ 近畿圏の美術館巡り。
- ⑤ インドネシアの歌をインドネシア語で歌う会：大阪ラグラグ会で歌って駄弁のを楽しんでいます。

以上、インドネシア語の傍流で過ごした人生。男声コーラスの今年のアンコール曲、石原裕次郎の「わが人生に悔いはなし」の歌詞にもある通り「右だろうが左だろうが 長かろうと短かろうと これもまた人生」の通り、まだしばらくお迎えが来るまでの時間、元気で人生楽しもうという思いです。





キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 菅原 由美

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

平成28年度新入生入学

4月4日に入学式が執り行われ、13人の新入生がインドネシア語のクラスに入ってきました(インドネシア語専攻12名、日本語専攻1名)。

今年は男性が4名、女性が9名でした。今、昨年度の休学・留年組とあわせて、15人で授業を受けています。今年の1年生は個性豊かで、元気いっぱいだと、もっぱらの評判です。

1年生の授業では毎年、留学生の Pika Yestia



Ginanjar さんにティーチング・アシスタント (TA) としてお手伝いしてもらっていましたが、Pika さんが博士学位を取得し、帰国することになったため、今年の前期は、Tengku Munawar さんに TA をお願いしました(1年生と一緒に写真に写っています)。

インドネシア人留学生との交流会

恒例化してきましたが、今年も PPI-ON (Persatuan Pelajar Indonesia-Osaka/Nara インドネシア留学生協

会大阪-奈良支部) との交流会が始まりました。

まず、4月27日に豊中国際交流会館で、ちらし寿司を作って、新入生歓迎会を開きました。それから、断食中の6月25日に、箕面市立コミュニティセンターでブカ・プアサの会に参加させていただきました。それから、断食が明けたルバランの日(7月6日)の夜、Silaturahmi の会に招待され、皆でルバランの料理を堪能してきました=写真。



EPA 候補者との交流会

あびこの HIDA 関西研修センターで、毎年、インドネシア人看護師・介護福祉士候補生が日本語研修を半年間行っています。OB 会長宮崎衛夫さんのご紹介により、昨年からはインドネシア語専攻の学生たちが訪問し、彼らとの交流の機会を持っています。今年も、7月22日に出かけてきました。

2時間ほどの交流会でしたが、昨年同様、学生と看護師さんたちとの友好関係が広がっていくことを期待しています。

夏祭り

7月9日土曜日、例年通り箕面キャンパスで夏祭りが開催されました。今年は、1年生と2年生が、各々模擬店を出しました。夏祭りの規則が厳しいので、当初予定していたメニューではない、かき氷と焼き鳥(サテではありません)を作って販売することになってしまったようですが、初めての学園祭参加を十分に楽しんでいたようです。来年はもう少しインドネシアっぽい料理が出せるといいのですが…。暑い中、ご苦労様でした。

総領事館主催スピーチコンテスト



今年から在大阪インドネシア総領事館主催のスピーチ／朗読コンテストが開かれることになり、7月10日北区中之島の新オフィスで第1回が開催されました。3年生からは山井寛子さんが、2年生からは藤森優菜さんと柴田拓真君が参加しました。

山井さんはスピーチの部で優勝、藤森さん、柴田君は朗読の部の優勝、準優勝という素晴らしい成績でした。

総領事館のホームページでも大きく取り上げられています。是非、一度ご覧ください。(Mahasiswa Universitas Osaka Menjadi Pemenang pada Lomba Pidato dan Membaca Cerpen Bahasa Indonesia KJRI Osaka 2016. URL: <http://www.indonesia-osaka.org/berita/2016/07/10/mahasiswa-universitas-osaka-menjadi-pemenang-pada-lomba-pidato-dan-membaca-cerpen-bahasa-indonesia-kjri-osaka-2016/>)

Ⓜの写像是同ホームページから

様々な留学

これまでインドネシアへの留学やインターンシップは、私費かインドネシア国費のダルマシスワ奨学金を利用して行うことがほとんどでしたが、昨年からは様々なタイプの留学の機会が増えてきました。

一つは、国際交流基金アジアセンターによる「日本語パートナーズ」で、インドネシア各地の高校で日本語教師のアシスタントをしながら、現地の高校生に日本の文化や社会について教えるというインターンシップ・プログラムです。9月から、3年生の吉村星梨花さんが西スマトラのパダン・パンジャンの高校へ、竹本昌史君が中部ジャワのマグランの高校へ派遣されます。

もう一つは、官民協働海外留学支援制度「トビタテ! 留学 JAPAN」です。これはボランティアやフィールド



ワークなどの「実践活動」に重点を置いた留学計画を支援するプログラムで、昨年度谷美千帆さんが挑戦し、今、ジャカルタの国立イスラム大学 (UIN) に留学中です。今年度は3年生の李忠起君が挑戦、西スマトラにある国立アンダラス大学への留学が決まりました。

どちらのプログラムも、事前研修がある大変なプログラムですが、頑張ってきてもらいたいと思います。



☆五輪と南十字星☆ 2016年夏の五輪。開催都市リオの会場ではブラジル国旗が目立ち、選手たちの熱戦がテレビで世界各地に伝えられました。ブラジル国旗にデザインされた26州と1連邦直轄区を示す27個の星は、リオから眺めた夜空の様子です。ほぼ中央に星座「南十字星」が描かれています。ただ、天球の外側から見たイメージなので、オーストラリアなどの国旗に使われている南十字星とは違って、左右が反転しています。

☆インドネシアのメダリスト☆ リオ五輪でインドネシアが獲得したメダルは計3個でした。期待されたバドミントン (bulu tangkis) で、混合ダブルスの Tontowi Ahmad/Liliyana Natsir の男女ペアが「金」。8月17日の祝日・独立記念日の栄冠でした。序盤の重量挙げ (angkat besi) で女子48kg級の Sri Wahyuni Agustiani と男子62kg級の Eko Yuli Irawan が各「銀」に輝きました。アグスティアニは三宅宏実 (銅) を上回り、日本でTV放映を見た人も多かったはずで



22年越し念願の駐在

播磨 栄治 (1994卒)

1994年に大阪外大インドネシア・フィリピン語学科インドネシア語専攻を卒業し、現在勤めている木材建材商社の住友林業に入社しました。

今になって思えば、この会社を選んだ理由もインドネシアにたくさん拠点があり、きっとインドネシアに駐在出来るであろうという非常に浅はかな考えのみ。インドネシアでどんな仕事がしたいかといったビジョンも全くなく、反省することしきりですが。

いずれにせよ「学生時代に学び、愛したインドネシアで働きたい」。そんな思いで社会人の世界のドアを叩いた訳です。

ところが、入社後初めの配属は東京での建材の国内向け営業。インドネシアとは全く縁のない世界でした。その後も、名古屋、横浜、東京と国内を転々。忙しい日々の中で入社当時に抱いていた夢も忘れかけ、このままでもいいかなと思いついた頃に突然、インドネシア駐在の辞令が下りました。

辞令が出たのは2015年4月。入社後22年越しでようやく念願がかなったこととなります。9回目の異動にして初のインドネシア駐在です。インドネシアでの職務は、現地法人(PT. SUMITOMO FORESTRY INDONESIA)の社長という重責でした。が、とにかくプレッシャーよりも、楽しみでいっぱい。そんな思いでジャカルタの地を踏みました。

さて、そのように紆余曲折もあって22年ぶりにどっぷりとインドネシアに浸る生活が始まったのですが、学生時代からの大きな変化に戸惑っています。

まず、22年ぶりに使うインドネシア語は、完全に錆びきってしまいました。こんなはずではないと思い



パソコンを机上に置いたオフィスの自席で
2016年7月

ながらも、簡単な単語も完全に頭の中から消え去っています。伝えたいこともままなりません。新たに勉強しようにも40代中盤の中年世代にとって、記憶するのがこれほどまでに難しいことなのか、と改めて思い知らされました。

仕事や日常会話で聞き覚えのある単語に出会い、後でこっそり辞書を取り出してチェックし「ああそうそう、これはこういう意味だったな」と納得。覚えたつもりでも、次に聞いた時には、「あれ？聞いたことあるけど何だったっけ？」となってしまう始末です。駐在生活が始まって1年以上が経過し、少しは改善の兆しが見えつつあります。でも、依然として悪戦苦闘が続いています。

次に、ジャカルタの街の風景の変化です。

学生時代に初めてジャカルタを訪れた際には、高層ビルや大きなショッピングセンターはまだあまりなく、あちこちに建築中の現場があったように記憶しています。そういった街の風景にエネルギーな活気を感

じ、なんとなくワクワクしました。街中にはベチャやバジャイが走り、バジャイを乗り継いで移動したり、たまに騙されたり。

また、インドネシア式のトイレを使用する勇気がなかった私は、外出する際には必需品として常にデイバッグの中にトイレットペーパーを携行していたのを覚えています。



会社の従業員らとにこやかに(前列右から2人目が筆者)

現在のジャカルタは当時建築中であった高層ビルやショッピングセンターが完成し、中心部の街並みだけを見れば世界でも有数の大都市と言っても過言ではありません。昔のように、トイレを探して街中を徘徊…なんて必要ありません！もちろん、トイレットペーパーも携行していません。また、丸亀製麺やCOCO 壺番屋、大戸屋などジャカルタにいる限り、いつでもどこでも日本食が食べられる環境にあり、本当に便利になりました。

一方で、渋滞の激しさには辟易します。ジャカルタは世界でも有数の渋滞都市（英カストロール社が2015年に世界78都市を対象に行った渋滞調査ではバンコクなど世界の強豪を押さえ1位に輝いたとか）です。

普段30分の通勤区間が時間帯によっては3時間、事務所の前の道路をUターンするだけで1時間半かかることもあります。大事な商談に遅刻してしまったり、またせっかくの休日が車の中で大半が終わってしまったり。逆に渋滞を見込んで早めに出発すると、あっという間に目的地に到着してしまい、時間を持て余すなどと結構ストレスが溜まります。

しかしながら、実は一番変わってしまったのは自分自身なのではないか？そんなことに気づかせてくれたのもまたインドネシアです。

バジャイに乗ったり、シャワーのない安宿に泊まったり、トイレを探し回ったり、屋台で食事を楽しんだり、今思い返せば学生時代に魅力を感じたインドネシアは日本では味わえないワイルドさに溢れていたように思います。

社会人になり忙しい日々を過ごす中で、そういう不便さを楽しんで

受け入れる心を失っていたのではないかと反省している今日この頃です。きっと学生時代の自分であれば、大都市に変貌したジャカルタの街並みに喝采を送りつつも、同時に一抹の寂しさを感じ、この大渋滞にはまっても「そう、やっぱりこれがインドネシアだよ」と心のどこかでほくそ笑む余裕があったのではないのでしょうか。残りのインドネシア生活で、是非ともワイルドで豊かな心を取り戻したいと考えております。

さて、独り言のようなことをつらつらと書いてきましたが、ではインドネシアでの生活を楽しんでいないのか



と問われますと、そうではありません。しっかりと楽しんでおります。

月並みではありますが、こちらでは毎週末のゴルフが趣味のようになりつつあります(写真④コンペ出場時)。もともとゴルフはなかなか上達せず、あまり好きではなかったのですが、こちらに来てからはほぼ毎週末、ゴルフに。初めは正直嫌々参加していましたが、いつの間にか週末が待ち遠しくなってきました。スコアは恥ずかしくてここに書けるレベルではありません。とにかく帰国までに100を切ることが目下の目標です。

また、毎年5月頃にコンパス社と毎日新聞社の共催で開催されます「ジャカルタ絆駅伝」にも毎年参加しています(写真⑩15年参加チーム⑩大会後AKB48メンバーと記念撮影)。当社の現地スタッフも楽しみにしており、まさしく社員の絆を深めるのに最適の企画です。

実は学生時代にはマラソンは得意で、自信がありました。そこで昨年初めて出走したのですが、2^{キロ}を完走するのがやっと。かなりショックを受けました。来年に向けて今からひそかに練習し、来年の大会では皆をあっと言わせるのが今から楽しみです。



寄稿

Apa & siapa

趣味の映画と 縁切れずに

ひろお
笹原 敬生 (1979 卒)

大学時代、語学については劣等生だった私がこの会誌に文章を書くなど、もっての外なのですが、語科の大先輩から頼まれ、断り切れず筆を取った次第です。

私は上本町8丁目校舎最後の卒業生で、中西龍雄先生、磯浦美恵子先生、森村蕃先生、ハジ・イスマエル・ナジール先生の4名に教えて頂きました。

外大卒業と同時に住友建設(現:三井住友建設)東京本社に入社し5年間働きました。新入社員の6カ月間は神奈川県足柄下郡真鶴町の岩大橋の建設現場で研修。その後本社の海外事業本部に配属となり、業務課と工務課を経験しました。バンコクの橋梁(メモリアル橋)担当でしたので、その入札及びタイ政府とのネゴでバンコクを訪れました。そのため、専門とは違うタイ語の方が得意になりました。

そうこうするうちに、地元宮崎に宮崎市郡医師会病院が建設され、事務を数名雇用するという事で、筆記試験・面接試験になんとか合格し、1984年2月に転職しました。それから約30年宮崎市郡医師会に勤務し、現在は宮崎看護専門学校事務長という役職についております。あと2年半の定年まで職務を全うするつもりです。

というように、大学で学んだインドネシア語を使うこともなく過ごしておりました。宮崎県インドネシア友好協会の故・矢野会長から、かつて宮崎在住のインドネシア人の関わった裁判が多いとうかがいました。通訳を頼まれたのですが、私のレベルでは無理ということでお断りしたこともありました。咲耶会の宮崎県支部では、執行部に属し、会のお手伝いをしています。数年前からインドネシア語の後輩の竹前望美さん(1994卒)もご主人の転勤で宮崎に来られ、当地の総会に参加されています。

ところで、私には「映画鑑賞」という高校時代からの趣味があり、高校1年時から深く研究しており、その後本格的に映画に関わることになりました。大学入学と同時に映画研究会に入会しましたが、当時部長だった広岡裕児氏(フランス語科)はすぐにパリに留学されたため、2年時から私が部長となり、8ミリ映画を2本製作しました。と同時に創刊したばかりの神戸新聞社発行の「京阪神Lマガジン」の編集者募集に応募



したところ採用され、初代の映画担当として3年間三宮の神戸新聞別館の事務所に通いました。そのおかげで、映画はほとんど試写室で鑑賞し、関西の主な映画人との繋がりもできました。三宮のサンプルザシネマガイドが出版した「ハロー!シネマ」という本も大学卒業までに3冊発行し、当時、京都府立医大在学中の大森一樹監督の映画「夏子と、長いお別れロング・グッドバイ」にもスタッフ(進行)として参加しました。毒舌で有名な井筒和幸監督とも行動を共にし、新藤兼人監督、石井聡互監督にもインタビューしました。この時に知り合った映画人の人脈が後に宮崎映画祭のゲスト招聘時に役に立ちました。

卒業後も東京で「シネマディクト」という映画の会に参加し、テアトル東京のラストショーのイベントも主催しました。宮崎に帰ってからは「シネマ1987」という映画の会を立ち上げ、29年が過ぎました。毎月発行の冊子が約350冊、年間ベストテン号は29冊発行

して現在も続けております。また、宮崎映画祭も第1回から第21回(現在)まで実行委員を続けており、3回ほど、ゲスト(監督・俳優他)とのトークショーの司会もさせて頂きました。今年の1月にも大森一樹監督をお招きして映画「ベトナムの風に吹かれて」公開記念の囲む会を催し、監督とも再会することができました。

私の卒業論文が「スカルの政権の崩壊」ということで、本来ならここで、インドネシア政治の重要な出来事を描いた映画「アクト・オブ・キリング」(2014)と「ルック・オブ・サイレンス」(2015)について論評するところですが、後者は宮崎未公開でDVDも出ておらず、残念ながらここでは語る事ができません。

医師会に約30年勤務したおかげで、医療業界や地域医療、診療報酬や病院等について勉強させて頂き、詳しくなりました。インドネシア語とは遠い世界で生きてきましたので、外大卒というのも肩身の狭い思いをしておりますが、外大やその周辺で学んだことが、その後の人生に役に立ったことに大変感謝しています。

【写真は湯布院映画祭のパーティー会場で㊤「EDEN」の山本太郎さんと=2012年8月 ㊦「風の外側」の久保京子さんと=2013年8月】



寄稿

Apa & siapa

インドネシアで 見つけた日本の公民館

片山 信英 (1980 卒)

私は2016年3月末に60歳で神戸市役所を定年退職しました。再任用職員となった現在も、インドネシアのノンフォーマル教育、特に地域に根ざした学びの場である「コミュニティ学習センター」(インドネシア語ではPKBM: Pusat Kegiatan Belajar Masyarakat)について研究を続けています。

大学を卒業後、神戸市役所に就職。神戸ポートアイランド博覧会(ポートピア81)の前年でした。採用直後に上司からは「インドネシア語は何の役にも立たないよ」と先制パンチを受けたのですが、もともと、インドネシア語はもちろん語学に苦手意識があったので、むしろ当然のことだと感じていました。実際に経験した職場も、埋立地の管理、職員の給与制度、ボランティア・ヘルパーの創設、客船誘致など、およそインドネシアとは縁がないものでした。

しかし、51歳のときに転機が訪れました。館長として公民館に配属となったのです。公民館のことを調べているうちに、インドネシアには1万カ所を超える(2016年8月現在)PKBMが、日本の公民館をモデルとして設立されたとも言われていることがわかりました。

このことが契機となって、定年退職の3年前に神戸大学の大学院に入学し、インドネシア研究を始めることになりました。大阪外大時代は語学を敬遠していたにもかかわらず、必要に迫られてインドネシア語の文献も手当たり次第に読んでいきました。そして、一昨年、昨年と2年連続してインドネシアの小学校(写真⑤)やPKBMを訪問するとともに、バンドン市とタンゲラン市の路地裏でのアンケートや利用者インタビューによる現地調査(写真⑥)を行い、今年1月に修士論文を完成させました。

インドネシアの教育は、1945年の独立前後から読み書きすることができない非識字者の撲滅が主要事業で



した。現在では貧困などの理由により中途退学した子ども達や中高年の人々に対する中学校・高校卒業と同等のポケット教育とともに、幼稚園児よりもさらに年齢の低い2歳児からの幼児教育が学校外の教育としてのPKBMの主流事業になっています。そのことに驚きを感じました。そして、PKBMで無心に歌う子ども達(写真⑦)の姿を見ていると、わけもなく涙があふれて止まりませんでした。

その現地調査で一番感心したのは、4カ所のPKBMがそれぞれの地域特性を踏まえて活動を展開していることです。例えば、農村部の宗教財団がベースのPKBMは子ども達を対象としたイスラーム読誦会が活動の中心です。都市近郊にある宗教財団型PKBMは自動車運転、パソコン教室、グラフィック・デザインなど就労支援を目的に多様な講座を開いていました。また、都市部にある一般財団型のPKBMは対象者がほぼストリート・チルドレンで、人身売買・危険薬物から子ども達を保護する活動です。住宅地域にある個人運営型のPKBMは、通常のPKBMが活動しない土曜日と日曜日のみ開催して小学校や中学校と同等のポケット教育がメインです。四者四様の事業展開でした。



これらの活動は、戦後日本の公民館が社会教育、娯楽、自治振興、産業振興の中心として日常生活全般を対象として行ってきた活動そのもの。私は、まさにインドネシアで日本の公民館を見つけたのです。

しかし、現在の日本の公民館の状況は、経済成長がもたらした豊かさの中で、いつの間にか自治会の集会所に間違われたり、「民間カルチャーセンターと変わらない場」に変容しつつあるのではないかという危機感を抱いています。それゆえに、日本の公民館は、今こそインドネシアのPKBMに学ぶべきではないかと考えています。

ご報告 と お願い — 会報、総会、定員の件

会長 宮崎 衛夫 (65 卒)

会報「南十字星」は、前会長・山口寛さんのリーダーシップのもと 2005 年秋に創刊され、以降この 23 号まで毎年春と秋に発行されてきました(カット=既発行の会報)。この間、編集を一手に引き受けていただいた岩谷英志さんのご体調の変化で、21 号から幹事の中から若手を中心に編集委員会を組成し、新たな体制で取り組みを開始しました。新体制移行後の実績と反省を踏まえると、現役で活躍されている委員の皆さんに必要な時間を取ってもらうことに無理があり、今後は毎年 10 月発行の年 1 回にいたしたく、会員の皆さんのご了承をお願いします。

半年毎の会報を楽しみにしていただいていた方々には申し訳なく思いますが、幹事一同としても苦渋の決断であったことをご理解ください。年 1 回に減らすことは、その内容の充実でカバーしていくことが重要であると思っておりますので、引き続き会員一同のご支援とご協力をお願いする次第であります。



さて、本年は隔年に開催している南十字星会の総会が本誌の 12 ページでご案内の通り開催されます。大阪外国語大学・大阪大学外国語学部でインドネシア語を勉強した仲間が年次を超え一堂に会し、旧交を温め、また新たな交流のきっかけとなる良い機会です。どうか同窓やクラブの仲間をお誘い合わせの上、奮ってご参加くださるようお願いいたします。

なお、私の方から、ここ数年折に触れご報告している「インドネシア語定員問題」の件を、手短にご報告いたします。

昨年 11 月の西尾総長との面談にて“定員増お願い書”を提出して以降の動きとして、本年 5 月に総長と話す機会があり、その際には「前に進んでいる」とのご発言をいただきました。また、西田達雄さんからは、日本インドネシア協会の福田康夫会長にも現状を訴えて、側面から支援いただいております。インドネシア語が外国語学部の 25 の言語中、最も少ない 10 名という定員を憂える卒業生として、定員増という悲願の実現に向けて、外野席からではありますが、これからも尽力していきたいと考えております。

関東支部総会

支部長 辻本 雅洋 (75 卒)

7 月 16 日に「2016 年度南十字星会関東支部総会」を新宿住友クラブで開催しました。総勢 20 名の参加を得まして、多数の方々から近況報告などをいただき、終始和やかな雰囲気が進みました。ありがとうございました。

冒頭、宮崎衛夫会長から南十字星会の運営状況や、会報を年 1 回の発行にせざるを得なくなった事情、大学のインドネシア語科定員問題の進捗について、説明がありました。

西田達雄氏 (60 卒) からは、インドネシア語科卒業の多くの方々から各方面で日伊関係強化に向け力を注いでおられることもあり、語科の定員増達成と同時に、南十字星会の本部・各支部が健全に拡大発展していくことは、大きな



意義があると力説されました。

また、西川哲朗氏 (65 卒) からグリークラブ創部 90 周年の記念演奏会の案内 (12 月 3 日開催) を頂戴しました。歴史の重みを感じます。ジャカルタ支部のメッセージも皆さんにお配りし、いろいろと話の花が咲きました。本部・支部間の情報連絡も、貴重なものと存じます。

総会案内と返信率・出席率などを年次別に分析しており、来年度以降より多くの方にご出席いただけるようしっかり検討してまいります。ご支援、ご協力をお願いします。

会の名簿整理も進めています。連絡先や近況などメールいただければ助かります。

ジャカルタの交通渋滞 支部長 内原正司 (64 卒)

ジャカルタで長く続いていた“3in1”の制度が、16年5月中旬に廃止されました。結局は交通渋滞緩和の効果が上がらなかったのです。「1台の車に3人以上」という規制の裏で人数合わせに乗り込む商売人(ジョッキー)が社会問題化したことや、確認のチェックが逆に車の流れを悪くすることもあったようです。渋滞はその後、さらに酷くなっています。

喫緊の問題としてジョコウィ大統領、アホック州知事がどんな手を打つか。大きな期待がかけられています。車の生産調整・禁止などにならないように祈るばかりです。

当方は、渋滞を逆手にとって、車の中で電子機器を操り(?)仕事をしています。大好きな本を読む。そうして、なんでもう着いたのかと…。発想を変え、しのいでおります。



◆ 懐かしい仲間 ◆

64年卒の同期会(マタハリ会)が7月2日昼、新大阪駅に近い料理店で。10人が出席(岩谷、内原、岡本、小川、小西、澤井、瀬戸、辻、西谷、藤野)。過去最高人数となったのは、世話役の尽力です。実際に会うのは卒業以来52年ぶりというケースも。笑顔で歓談。2次会はそばの喫茶店に場所を移して続けました。

インドネシアから一時帰国した内原氏からは最近のジャカルタ情勢を。皆さん高齢になっていて、病気と体の話が多くなります。日本では“ガンまがい”の診断が多いとか。「私も“まがい”の胃ガンだったか? 切除しなくてよかったのかも」という声まで。

消息

ひとこと (敬称略)

磯田良一 (55 卒) =埼玉県さいたま市
「南十字星会」のお世話有難うございます。現役として毎日元気に頑張っております。週4回ぐらい近くのプールで水泳を楽しんでおります。

磯浦美恵子 (58 卒) =大阪府吹田市
岩谷様—くれぐれもご自愛ください。
宮崎様—一定員増のご尽力、感謝します。

山口 寛 (58 卒) =大阪府枚方市
激動する ASEAN 諸国のニュースを見れば世界の今が分かるとばかりに、相変わらず ASEAN とのつながりに夢中の毎日です。南十字星会の益々の発展を祈念しております。

山下 進 (61 卒) =京都府宇治市
南十字星会は永遠です。会員であることを喜び、楽しい思い出を浮かべつつ。

粕谷俊樹 (62 卒) =滋賀県大津市
「南十字星」誌にも寄稿されたことのある服部英樹氏 (イスパニア語学科 4 回卒) が 16 年 2 月に逝去されました。専攻のスペイン語はもとより英仏中語に堪能で、商社の駐在員として東南アジア生活が 20 年を超え、独学でマスターしたインドネシア語の研究者として著した専門書が 6 冊。海外雄飛を夢見、語学を磨き、志を果たした生粋の大阪外語マンに合掌。

小原一浩 (63 卒) =大阪府大阪狭山市
昨年の統一地方選で大阪狭山市の 2 期目の市議に当選。次も出るの? の問い

に対して、知力・体力・気力などがあれば出ますと答えています。勿論、命あればの事。剃髪 (スキンヘッド) して 6 年、俗世間を超越して少しでも人のお役に立てれば、我が人生悔いなしの心境 (今年は喜寿)。

堀田 実 (63 卒) =千葉県船橋市
後期高齢者となり、体のあちこちでガタが出始めましたが、家事と遊びにと充実した毎日を送っています。

有井 晟 (65 卒) =奈良県香芝市
外大時代はインドネシア語科の落ちこぼれで、余り出席もせず、インドネシアと関係のない仕事をして 50 年経ちましたが、今は年 2 回 pagi-pagi 会 (65 年卒同窓会) に毎回出席しています。何か皮肉な感じです。今のところ元気です。

扇谷竹美 (66 卒) =千葉県佐倉市
6 月に同期会。毎回楽しみですが、この後いつまでも続けたいですね。

沖 政夫 (66 卒) =兵庫県神戸市
第 22 号の皆さんの投稿楽しく読ませていただきました。また、宮崎会長の報告から世話役の苦勞が良く分かりました。今後とも会員のため活動お願いいたします。

山下勝男 (66 卒) =東京都国分寺市
7 月で後期高齢者の仲間入りです。とりあえず元気です。会報を楽しみにしております。毎回の編集ご苦勞様です。

和田 肇 (67 卒) =奈良市

7、8 年前から毎年夏、妻と共に米国旅行を楽しんでいます。今年は、ヘミングウェイの墓参りを兼ねてアイダホ州をドライブしてきました。英語学習を兼ねて、ロッキー山脈沿いの雄大な山々を堪能できました。

広瀬加代子 (68 卒) =大阪府茨木市
いつもお世話になっております。

本田正伸 (69 卒) =兵庫県川西市
完全リタイアしてから 5 年。タイのチェンマイをベースにロングステイを楽しんでいます。

丹羽慎吾 (75 卒) =愛知県岡崎市
シンガポール、タイ、インドと駐在し、今年はやっとジャカルタに行けます。

高須加奈子 (83 卒) =京都市
—昨年 12 月に京都に転居いたしました。磯浦先生の 22 号お写真には驚きました。楽しく読ませていただきました。

松下聖次 (91 卒) =大阪府堺市
いつも会報ありがとうございます。

里 真吾 (02 卒) =大阪市
スマトラで日本語を教えています。

◆ おくやみ申し上げます ◆

下記の方々の訃報が届きました。

廣田長三郎 (41 卒) =京都市、16 年 6 月
服部英樹 (56 卒) =四日市市、16 年 2 月
本城丈夫 (64 卒) =京都市、16 年 3 月